

『東方』三〇一号より

中国の社会派 エンタテインメント小説登場

水野 衛子(映画字幕翻訳者)

のっけから私ごとの話で恐縮だが、ハルピンの黒龍江省社会科学院の敷地内にある建物を借りて私の夫(中国人)が経営していたレストランが、敷地内に高層のオフィスビルを建てるからという理由で賃貸契約期間がまだ二年も残っているのに家主の社会科学院に一方的に追い立てをくったことがある。二百人は収容可能な宴会場があり結婚披露宴で結構稼いでいたので、あまりに少ない立ち退き料に納得がいかないと抗議しているうちに、あつという間に解体屋がやって来て音響設備から食器にいたるまですべての備品を勝手にどこかに運び去り、建物を取り壊してしまつたのだ。当然、理はこちら側にあると裁判に訴えたのだが、審理が一向にはかどらない。その理由を聞いてびっくり。何と相手の社会科学院院長の娘婿が省党委員会書記の秘書だとかで、その権力を使って裁判所に圧力をかけて裁判を妨害しているのだという。こうなつたら中央から言つてもらふ以外には埒が明かないというので、私が北京の最高人民法院長に直訴の手紙を書くことになつた。なぜ夫ではなく私が書くかという点、レストランに出資もしていませんし、外国人からの訴えのほうが利くはずだからとのこと。こんな裁判妨害は日本では考えられないと手紙に書いたのが功を奏したのかどうかは分からないものの、その後しばらくしてようやく裁判は動き出し、何とか勝訴するこゝとしました。しかし、相手側に命じられた賠償額は当初提示

▶ トップページにもどる

張平著／荒岡啓子訳

『十面埋伏』(上・下)

四六判・各四〇〇頁・新風舎・各二、八九〇円



された立ち退き料とまったく同じ六十万元、それも裁判所に強制執行力がないために五年後の今もたつたの十八万元しか支払われていない。持ち去つた備品の賠償も一切なし。つまり裁判に負けたも同然だった。

私のこの手痛い経験を見るまでもなく、権力に近いところにいる者ほど美味しい汁を吸えるというのは中国人にとっては自明の理で、本作の作者張平の一連の作品が人気があるのはそうした権力を利用して庶民に害を加える人間に対して敢然と立ち向かう姿を描いているため、実際にはそうはできない人々が読んで胸のすく思いがするからに違いない。中国のベストセラー大賞、金盾文学賞、中国図書賞の三大文学賞を受賞したという本作もまた権力の圧力に抵抗して死力を尽くして闘う刑事たちを描いた中国の警察小説だ。

重い心臓病を患う妻の負担を軽減するため、某省のとあ

る地区の刑務所に異動した元公安員(警察官)の羅維民は受刑者の王国炎の言葉に驚愕する。何年も未解決のままの銀行強盗殺人事件に関する部外者以外は知りようのないことがその受刑者の口から漏らされたからだ。王国炎は犯人か犯人に非常に近いところにいる者に違いないと羅維民は確信するのだが、刑務所の幹部たちは王国炎の言葉をただの狂人の戯言としてまともに取り合おうとせず、当人を精神病の治療のため刑務所の外の病院に移す予定だということではないか、と刑務所の態度に不審を抱いた羅維民は密かに公安時代の同僚の魏徳華とその上司である公安本部長の何波に相談する。公安が極秘で調べていくうちに王国炎の背後には強力な政治的経済的バックがあることをかぎつける。省都党委員会書記の甥で省都公安局の副分局長である姚・利と省人民代表大会副主任の義理の甥である不動産開発業者の仇曉津と王国炎とは互いに持ちつ持たれつの強い利害関係にあり、どうやら未解決のさまざまな凶悪犯罪にこの三人を中心としてつながる「黒社会」が絡んでいるらしいことが明らかになっていく。だが、刑務所内部にも政界にも「黒社会」から賄賂を送られている人間が何人もいるらしく、しかも一体誰が彼らに与しているかが分からないため、羅維民、何波、魏徳華の題名どおりの『十面埋伏』(周りに隙なく伏兵が潜んでいること)の中での苦闘が始まる。

まず、いくら有力者の後ろ盾があるとはいえ、王国炎らが犯した犯罪の残忍さと大胆さに驚く。自分たちの出世の妨げになると、中央から赴任してきた若い市長まで交通事故故死にみせかけて殺してしまうし、彼らの一味による土地不正売買を調査していた規律委員会副書記宅を爆破してし

▶ トップページにもどる

まう。前作の『選択』でも作者は国营工場の幹部たちの腐敗を取り上げ、工場の資金を横流しして海外視察旅行と称して派手な買い物旅行に行ったり、親類に高級クラブなどを経営させて、工場を閉鎖に追いやり、何ヶ月も賃金が払われない労働者たちが貧窮にあえぐのを尻目に私欲を肥やす工場幹部たちの姿を描いていたが、そこに描かれていたのはあくまでも経済犯罪であった。そのすぐ数年後に作者がこうした凶悪犯罪にまで手を染める権力者たちの姿を描いている点に、中国社会の深刻な悪化を思いやらずにはいられない。

その『選択』でも国营企業労働者たちの年を越そうにも暖を取る石炭を買うお金もない暮らしぶりが出てきて胸が痛んだが、今回も耕地を村の幹部に勝手に売却された農民が食うに困ってトラクタの荷台から落ちた豚の飼料を持ち帰って食べている描写には胸が詰まった。まるで北朝鮮並みの貧困の存在。それもこれも為政者の腐敗と無能が原因なのだ。その農民たちがついに決起して公安に押しよせる場面も現在中国の各地で起きている農民の決起集会や暴動を思い起こさせる。やるせない気持ちになるのは、犯罪を犯す側の事情についても同様で、主犯たちが悪に染まっていった遠因は文化大革命時代に送った悲惨な少年時代にあったと作者は描く。高級幹部の息子だった王国炎と孤児の羊飼いで育った仇曉津は政治運動によって幼くして両親と引き離され、社会から見捨てられて成長したために歪んだ人格を形成させていく。文革の禍根も実に深い。

このようにストーリーを書いていくと深刻で硬質な政治小説のように思われるかもしれないが、エンタテインメント小説としても充分に楽しめる趣向も凝らしてある。笑ったのは地区公安本部長の何波がお金がなくて入院もままな

らない羅維民の重病の妻を地区の病院の幹部病棟に入院させるくんだり。最初はけんもほろろの応対をする病院の事務主任が、病院で何か突発事件があっても公安の手助けは要らないということかと脅されると、掌を返したように態度が変わり、空気がないはずの病室に入院できることになる。そのやりとりはまさに中国でしばしば目にするもので、このように腐敗を暴く側の人間もやむをえない状況下とはいえ、権力をちらつかせてずるい手を使わざるを得ないのが中国社会で生きる知恵なのは実に皮肉である。

前半に緊迫感をもたらすのは、誰が犯罪者に加担しているのが分からない五里霧中状態で少しでも闘いを有利にするために刑務所内の味方を探していく過程で、羅維民は同僚の刑務所捜査官の趙中和に対し、何波は旧知の友人である刑務所副政治委員に対して、相手を信じて自分たちの作戦を打ち明けていいのかを決めかねて逡巡する。結局一人は敵側だったことが最後に分かるのだが、私も最後まで騙されてしまった。上下巻と長いが、上巻は誰が敵で誰が味方かという腹の探り合いの心理戦と、次々に明かされていく王国炎たちが関わった犯罪をめぐる驚愕の真実にぐいぐいと興味を惹きつけられて一気に読めるし、下巻になると何波が「黒社会」に連れ去られ、ロートルながらの必死の脱出劇があったり、王国炎が刑務所を強行突破して脱獄するあたりから物語は一気に活劇アクションへと突き進むので飽きることはない。

王国炎が病院から羅維民の妻子を誘拐し人質として爆薬を積んだベントに乗せて逃走するのを、羅維民が何と天津シャレードから紅旗に乗り継ぎながら追うというカーチェイスはまるで香港映画を見ているようだし、事件を知った中央電視台がヘリコプターを飛ばして実況中継はするわ、

▶ トップページにもどる

仲間割れした犯人同士が小学校の校庭を占拠して小学生を楯に公安の包囲網の中、銃を撃ち合って対決するわけでハリウッド映画さながらの展開となる。本作は既に映画化も決まっているそうだが、後半の活劇シーン満載のあたりは最初から映画化をにらんだ設定描写かもしれない。

ただ、これをどう映画化するかに関しては少々危惧もある。せっかく映画化する以上はチャチな作りにしたら勿体ないし、ましてや前作の『選択』の映画化『生死選択』のように単に腐敗と闘う清廉潔白な幹部の英雄的行為を描くという国策映画にはして欲しくない。うまく撮れば『インファナル・アフエア』を超える骨太な傑作アクション物になりうる題材なのだから、中国も荒唐無稽な大作武俠映画ばかり撮っていないで、ここは本腰を入れて潤沢な資金と優秀なスタッフキャストを投入して、今までの中国映画になかった社会派アクション娯楽大作にして欲しいものだ。ついでにキャスティングに注文を出すと、王国炎役は『セブン・ソード』の悪役が見事だった孫紅雷を置いて他にない。実直な何波には李雪健がぴったり。羅維民には女性観客動員も考慮して胡軍か黎明(レオン・ライ)あたりを使いたいところ。それにしても魏徳華という名前には作者のアンディ・ラウにやってももらいたいという期待でも込められているのだろうか。私は読んでいる間中、すっかり劉徳華と脳内変換してしまっていた。そう言えば『LOVERS』の原題も『十面埋伏』だった。